

2004年度 日本ライフセービング協会

学生委員会

学生委員会発足にあたり
「新たなる出発」

学生委員という存在が、昨年までのような学生選手権の企画・運営のみにとどまらず、学生ライフセーバーとしての課題を探り、社会に対して夢のある自治活動になるよう、彼らと多くの時間を共有したいと思っている。議論することや情報を提供すること、何かのイベントを成功させること。すべては学生委員として大切な責務である。しかし、その責務にとらわれることなく、「ノビノビと発想し、ハツラツと活動し、イキイキと評価する」ことが、学生の代表機関としてあるべく姿と考えたい。そして、「情」のある情報を常に発信していきたい。つまり、誠意や真心、思いやりの気持ちと表現される意味での「情」である。これらのコンセプトを大切に、学生委員会は「さらに縁の下の力持ち」となれるよう、一つ一つを確実に進めていきたいと考える。

最後に…。学生委員会の立場はあくまで母体となる各クラブでの活動が主体である。そのフィールドが充実してこそ、学生委員としての資質を高めることに通ずると私は考える。つまり、「うちの学生委員が言うなら、みんな協力しようぜ」という信頼性と期待感を抱かせるようであればならない。この考え方をきちんと認識し、確認するという姿勢から学生委員を出発しなければならないと思っている。

1年間、よろしくお願い致します。

平成 16 年 3 月 3 日
日本ライフセービング協会
学生委員長 松本 貴之

学生委員としての心構え

- ・ 「あいつが言うなら協力してやろうぜ」という存在
- ・ “刺激”のコーディネーター
- ・ さらに縁の下の力持ちとなる
- ・ まっすぐに評価し、吸収する
- ・ 『情』のこもった情報を伝える
- ・ 奉仕できる喜びこそ、最高の報酬である
- ・ 与えられるよりも与えること、尽くされるよりも尽くすこと
- ・ 難しいことを易しく、易しいことを深く、深いことを広く

学生委員の組織

- ・ 三役を中心とし、総務部、広報部、競技部、企画部から成る。
- ・ 参加大学、各種学校…日本体育大学、法政大学、専修大学、日本女子体育大学、筑波大学、東海大学湘南校舎、東京女子体育大学、成蹊大学、国際武道大学、杏林大学、拓殖大学、國學院大學、国士舘大学、中央大学、早稲田大学、大阪体育大学、福井県立大学、東海大学海洋学部、神奈川大学、順天堂大学、東京健康科学専門学校、東京スポーツ&リゾーツ専門学校 計 22 校

【三役】組織の中心

学生委員長；松本 貴之（成城学園高校教諭）
学生代表；高木 溪太（日本体育大学3年）
主務；相澤 学（法政大学3年）

【総務部】三役からの情報を文章化、記録（議事録）。遠隔地への対応。会計業務。
総務部長；武石 太郎（成城大学3年）

【広報部】HPの運営。情報提供、公開。PR等。
広報部長；西井 智章（国際武道大学3年）

【企画部】企画の立案、実施。アンケート等、調査・研究によるフィードバック。
企画部長；小室 亜希（東京女子体育大学3年）

【競技部】主に、学生選手権大会の運営。
競技部長；石丸 宅馬（専修大学3年）

2004年度前期 学生委員主な活動報告

4月24～25日 ビーチイベント inODAIBA お台場海浜公園にて
5月22日 合同浜説明会 日本女子体育大学 M300 教室にて
5月29～30日 ユーアイピック 東京都世田谷区 駒沢陸上競技場等

2月28日	第1回 学生委員 全体会	成城学園高校
3月09日	学生委員 部長会	新宿
3月23日	学生委員 広報部会	新宿
4月10日	第2回 学生委員 全体会	国立代々木オリンピックセンター
5月15日	第3回 学生委員 全体会	成城学園高校
6月05日	第4回 学生委員 全体会	成城学園高校
6月18日	学生委員 部長会	成城学園高校 体育科教官室

今後の活動予定

9月18日	第5回 学生委員 全体会	成城学園高校（予定）
10月9日	第6回 学生委員 全体会	未定
10月16～17日	第19回 全国学生ライフセービング選手権大会	御宿海岸
10月30～31日	リーダーズキャンプ	場所は未定 内容に関しては後日連絡
11月6日	第7回 学生委員 全体会	未定
12月4日	第8回 学生委員 全体会	未定
1月08日	第9回 学生委員 全体会	未定

部長会、各種部会が予定以外にも開かれます（特にインカレ前に）。

「学生におけるライフセービング活動」～スピリットとコーチング～

- ・ 「救命」「スポーツ」「教育」「福祉」「環境」の5つの要素をバランスよく育てていき、その基盤となる「ライフセービング スピリット」を学生時代にどれだけ理解、共感を得られるのかが大切である。
- ・ スピリットとは・・・自らの力の限り“**尽くす**”ということ。

救命

- ・ 生命を救うことの知識や技術の実践を、いかに使わないようにするか。→事故を未然に防ぐ。
- ・ 「**NO RESCUE**」こそ、ライフセービングの使命である。
- ・ 救うことより、守ること。

スポーツ

- ・ 競技の No.1=レスキュー技術の No.1。
- ・ ライフセービングはスポーツではないが、ライフセービング競技会はスポーツである。
- ・ 救助する確率を競い合うことが、人命救助につながっている。
- ・ ベストを出し続ける原動力とは・・・
「信頼」「評価」「刺激」「勇気」という仲間との関係。
- ・ 救助力向上だけにとどまらず、「原動力のきっかけ=競技会」となることを理念としている。

教育

- ・ 事故を未然に防ぐということの本当の意味を伝える。
人を救えるという自信 } 他人への**思いやり**を知る。
知識 }
仲間の大切さ }
- ・ 海が好き、海で遊ぶ、ということから「生きる力」「思いやりの精神」を育てて、人を傷つけない子供（**生命尊厳**）、人に優しくなれる子供を育てる。
- ・ 先輩としてのコーチ（Coach）力を普段から意識する。

Communication	コミュニケーションする
On going	自ら成長する
Affection	愛情を注ぐ
Character	自身の人間性
Harmony	調和やバランス

各種資格制度の改定について

- ・ インストラクター制度の改定
イグザミナーの廃止し、スーパーバイザーを創設。
→スーパーバイザーは指導員養成講師を担当し、任期は2年間。
アシスタントインストラクターを、研修インストラクターに変更。
→インストラクターの下、ベーシック講習会を5日間、アドバンス講習会を4日間、Jr ライフセービングプログラムを4日間、研修を行う。
- ・ エレメンタリー・ライフセーバー制度の改定
エレメンタリー・ライフセーバー、改め、CPR 1 に改名（社会に通じる名称に変更）

DHL のパートナーシップ契約について

- ・ 日本ライフセービング協会（以下 JLA）と DHL（国際総合物流会社）が先日、5年間のパートナーシップ契約を結んだ。「安全」「迅速」「信頼」の精神が両者を一致させたのが最大の要因。また、「学生を中心とした教育活動の促進」も共通の目標。

第2回ビーチスポーツ in ODAIBA 報告書より

「第2回ビーチスポーツ in ODAIBA」を終えて

今回は、2回目の開催ということですが、去年もやっていたことなど、まったく知らなかった。「1年を通しての海辺でのビーチライフ」を目標に行われているイベントで、大変すばらしく、これこそライフセービングを世間に最大にアピールする場であり、ライフセーバーが積極的にやらなければならないイベントのひとつであると思った。この大会では、ビーチバレーを中心に様々なビーチ系の競技選手が集まり、その種目のトップアスリートも出場することにより、たくさんの一般人、子供たちも参加し、普段ビーチや海に無関係であろう人たちがたくさん集まった。ライフセービングだけでこれだけの人を集めるのは難しいかもしれないが、様々な競技が集まればたくさんの人が来てくれて、ライフセービングをまったく知らない人でも、“あの黄色と赤のお兄ちゃんて何だろう？”とか、“ビーチフラッグスって楽しいのかなあ”“心肺蘇生法ってどうやるんだろう？”というように少しでも興味を持ってくれただけでもよかった。

自分は今回は、主に心肺蘇生法体験コーナーを担当していたのですが、なかなか興味を持ってもらえなかった。呼びかけをしても、みんな逃げてしまう。やはり、心肺蘇生法となると怖く、一歩引いてしまうのだ。しかし、中には7歳の子供が親と来てくれて、興味深々に行っていた。少し嬉しかった。一家族に最低一人、蘇生法（気道確保だけでも）を知っていれば、何かあった時の救命率が上がる。これが現実化すれば、大変すばらしいことだが、現在はこれに程遠いと思う。もっともっと蘇生法の重要性を理解してもらうためにも、自分たちライフセーバーが、このようなイベントをもっと積極的に参加したり、講習会、Jr ライフセービングプログラム等をどんどん行うべきだ。

ライフセービングを普及するにあたって、競技は欠かせない。競技の中でも、ビーチフラッグスは世間一般にも知れ渡っていて、このようなイベントで行うのはいいと思った。今回は遊佐選手、本多選手、北矢選手、モーガン選手等のトップアスリートが来てくださり、ビーチフラッグスの迫力あるプレーを見せることができよかったと思う。子供たち

から大人の方々まで、たくさんの人たちが参加してくれて、熱く、真剣に、そして楽しそうに行っていた。この子供たちの中から、将来、ライフセービングを志してくれる子がいたら、いいなあと思う。障害者の人たちのオフロード用車椅子体験は、今まで障害があって海で楽しめなかった人も、このような車椅子に乗ることで海で遊ぶことができるようになり、それによって海を知り、楽しんでもらえれば幸いです。

今回、学生委員として初めてイベントを行いました。大変すばらしいものであったが、今回は、言われたことを行っただけだったが、これに負けにくいらいのイベントを学生委員でも作っていききたい。今回のイベントが学生委員の記念すべき 1 ページです。これから一歩ずつ、着実に歩いていきたい。

ライフセービングを、一人でも多くの人に知ってもらえるように……。

日本体育大学 3年 今井 昭裕

合同浜説明会 プログラムより

主催者挨拶

みなさんは、ライフセービングについてどのような考えを持っていますか？その考え、そのライフセービングスピリッツは十人十色。ライフセービングというものの捉え方は人それぞれであり、これが正しい！というものはありません。どんなライフセーバーでも、各自のライフセービングスピリッツというものを持っているのです。

「ライフセービング」という言葉からどんなことを思い浮かべますか？海水浴場の監視活動、ビーチフラッグス、海…。様々なことを思い浮かべると思います。「ライフセービング」直訳すると「人命救助」。その多くが「海」を連想することが多いと思いますが、ライフセービングというものは、海に限った活動ではありません。友達が悩んでいたなら一緒に悩んで、元気がないな、と感じたら気遣う。別れ際の「気をつけろよ」の一言。そんな日常生活の何気ない、人への優しさが、それもまたライフセービング活動なのです。

はじめからレスキューボード、レスキューチューブがうまく扱えるわけではない。救助技術が上手いわけでもない、早く走れる、泳げるわけでもない。しかし、ライフセービング活動はそれだけではありません。だから、ライフセービングは誰にでもできる活動なのです。

まずは、自分なりのライフセービングを見つけて、ライフセービングというものを感じてください。

先輩たちの声

「私にとってのライフセービング」

私は、ライフセービングと出会い、命の尊さ、海の楽しさ、そして怖さ、仲間の大切さなど多くのことを学んだ。今まで自分の経験してきたスポーツからは学べないことばかりで貴重なものである。これからライフセービングを始める人には、これから経験し、感じたりするひとつひとつが、これからの人生につながる新しい発見になるであろう。多くのことを学び、挑戦して行ってほしい。

言葉でうまく表現することはできないが、それほど「ライフセービング」というものはすばらしいものであると私は思う。存分に楽しんでください。

順天堂大学 LSC 4年 坂原 潤

「1年目」

今でも忘れることのできない1年目の夏。決して早くないスイムにラン。何をやっても納得することが出来なかった夏。あれから6年、未だに納得のいくものはひとつも無い。だからライフセービングを続けている。1年目にある先輩から頂いた言葉がある。「経験がないと自信がつかないし、自信がないと行動できない」行動するために、“一步踏み出す勇気”が必要だと感じた夏。一步踏み出す勇気を持って、あらゆることに挑戦し、失敗し、自分らしいライフセービング、納得の出来るものを見つけて欲しい。

自然に対し、人に対し、全てのものに対して謙虚さを忘れずに…。共に歩んでいこう！

鴨川LSC 渡辺 いづみ

「ライフセービング」

自分にとってのライフセービングは、「人を愛すること」です。人を愛することで、たくさんの人にエネルギーを与え、また、それにより、自分自身も新たなエネルギーをもらうことができます。

「ライフセービング」直訳すれば「人命救助」ですが、それは海に限ったことではなく、自分たちの生活の中で出来ること。海で事故を未然に防ぐことも「人命救助」ですが、生活の中で悲しんでいる人や、悩んでいる人に手を差し伸べて、元気付けてあげたり、一緒に悩んであげることも「人命救助」ではないかと思います。それは、人を愛する気持ちがあるからこそ出来ることだと自分は思います。

これからライフセービングを知る皆さんは、期待と不安でいっぱいだと思いますが、ライフセービングに触れ、たくさんの人とふれあうことで、人としてあるべき姿を見つけれられるのではないかと思います。

日本体育大学LSC 3年 橋本 淳太郎

「第2回学生委員会を終えて」

4月10日(土)国立オリンピック記念青少年総合センターにて、第2回目の学生委員会を開催した。今回は、委員長不在の為、学生のみで委員会となり、副委員長の私と主務の相澤が中心となり進行を務めた。まず最初に私が心肺蘇生法の普及の重要性について話した。この内容は、小学生が溺れているのを一緒にいた友人4人で岸に引き上げ、先日、消防本部の救急隊員から習っていた人工呼吸によって救うことができた話である。ここで伝えたいことは、小学生が習ったばかりの蘇生法で人命を助けることができた事実から、大学生ならより蘇生法による人命を救う確率が高いということが考えられるからである。これを各大学に学生委員を通して伝え、心肺蘇生法のフローチャートをプリントなどにし、昼休みなどに講習会を行い、蘇生法の理解を深めると共に普及を目的とする。このような活動を行うことで、救急の場面で助けようとしても、方法が分からず失われてしまいそうな命を救うことが可能になると私は考え、それを伝えた。全体の流れとしては、スムーズに進み、良くできたのですが、各部に分かれて話し合いになると、仕事の量に差ができてしまい、予定より長引いてしまった。しかし第1回目に比べると、分科会を各部で行っている為、コミュニケーションは少しずつではあるが、とれてきている。コミュニケーションができなくては、良いものは作れないと私は考えている。この能力は、学生委員にとって、必要不可欠である。私達、学生委員により、各大学、学生、そして地域クラブとの掛橋となり、そしていつかは大きなヒューマンチェーンに成長し、「人による、人の為の活動」として、真価を発揮し飛躍して行きたいと考えている。学生委員会で頑張ること

が、自己の大学のプラスとなり、自己の大学で頑張ることが、学生委員会のプラスとなる。それを信じて学生委員会、並びに学生代表の私自身の今できる限りの力で懸命にやっていますので、今後とも、よろしくお願ひ致します。

学生委員会副委員長 日本体育大学 LSC 3年 高木溪太

終わりに

新生学生委員が結成され早4ヶ月。まだまだ発展途上な状況ですが、冒頭の委員長からの挨拶にもありましたが、例年までの学生委員会の存在が、学生選手権（インカレ）だけの運営だけにとどまらず、様々なライフセービング活動に参加し、ライフセービングの普及とともに、日本のライフセービング界の未来を担う学生ライフセーバーの力を世間に out-put していきたいと考えています。そのためには学生委員の力だけでは達成できません。みなさんの協力が必要不可欠になります。その際は、協力よろしくお願ひ致します。

学生委員1年目で私たちですが、私たちにできる精一杯の力を出し、あらゆる活動に最高のパフォーマンスが出来るよう努めていこうと自負しています。

梅雨も明け、夏本番です。各浜で海開きもされ、私たちライフセーバーの真価が問われる、世間の人々にライフセーバーの存在をアピールする場でもあります。遊泳客の方々に安心感を与え、思いやりのライフセービング活動をし、常に安全で楽しい海水浴場を目指し、共に頑張っていこう！

7月吉日
学生委員一同